二〇二四年　夏季講習会

「『大無量寿経』に聞く」―本願―

※、はじめに

本願

一、　普通の二元的な本願の理解―他者・阿弥陀仏の誓い（あるいは愛）

○二元的な浄土真宗の理解―法（救う側）と機（救われる側）に分かれる

○二元的な浄土真宗の特徴

・阿弥陀仏は対象的な(自己の外なる)他者であり、浄土は私がいくべき対象的な世界。

本願は「仏に成って一切衆生を救おう」という阿弥陀仏の本願である。

・恩寵の宗教

・二元分別知の罪福信の宗教

・二元的な浄土真宗の特徴のまとめ

・救う側（阿弥陀仏）と救われる側（衆生）に分かれる。

・阿弥陀仏（法蔵菩薩）は救済主として対象的な（外なる）超越的他者。

・本願は阿弥陀仏が衆生を哀れんで、衆生を救おうという誓い（あるいは愛）。

○疑問

二、内在的超越

私の学びにおける、本願に関しての驚きと疑問の歴史。

○最初の「えっ！？」―大森忍師「歎異抄に聞く―第一章について―」（P68～71）

それで、問題はやはり宗教の主体です。…我々が仏教というものをこうして学んで参ります場合に、非常に大きな壁がございます。壁といえば本当に大きな壁がある。わからんといえば本当にわからん問題がある。これは、皆がそういう誤ちを繰り返さねばならないように出来ております。

阿弥陀様ということを、或いは如来ということを、絶対他者という言葉だけで表そうとすると、どこがキリスト教と違うかということになる。ここらあたりは、私達が正しく、仏法というものをうけとってゆこうとする場合、基本的問題として受けとっておかねばいけません。

キリスト教というのは神から始まる。最初に神があるというところから始まる。それは完全な一つの飛躍を要求しておる。…

それでは仏教は、阿弥陀さんから始まることになっとるか云うたら、違う。仏教は人間から始まる。…

だから、その意味から云うならば、お釈迦様が出現を致しましてから、いわゆる対象的なものというもの、それは神であろうと、仏であろうと、対象的な神とか仏というものをたてない。これが仏教の特質であります。これは非常に大事なことですよ。

・（遺教経）
死が近づきつつある釈尊に弟子がお尋ねした。
（弟子）「仏よ、あなたがこの世をお去りになるならば、私たちは何をたよりに生きていくべきでしょうか？」
（釈尊）「比丘よ、今日よりあなたたちは、
自らに依って、他に依らざれ
法に依って、他に依らざれ
自らを灯とし、法を灯とせよ」
この釈尊の遺言には二元分別知では理解できない二つのことが語られている。
①法（如来・阿弥陀仏（法蔵菩薩））は私にとって他者ではない。
②「自らに依る」ことと「法に依る」ことが一つであるような自己が実現する。

如来も他者じゃございません。むしろそれは、人間の存在根拠となってきたものが如来である。こういうふうに領解せねばなりません。そうせんと、他者というだけになったら仏教でなくなる。…
だからもし、如来様が対象物ということになりますならば、浄土真宗の教法というものは、どうしても成り立たないです。それは成立しません。従来、阿弥陀様というものを、対象物と考えて来たんじゃないかと思います。だから「廻向」という場合でも、対象的な阿弥陀さんが何かをくれるという、何かをくれそうないうんだから、高座の前で口を開けて待っている。あまり来ぬもんじゃから帰りがけには、すっからかんで、出したのはさい銭ばかりで後は何も残らん。残ったのは感激ぐらいのこと。そんなことが仏法だと思うておるから、いつまでたっても自覚にならん。生きた仏法にならない。これは非常に大きな課題です。
如来というのは、私達にとって単なる他者でなしに、それは本来的なものである、と聞くでしょう。本来的なもの。だから、如来様というのは、私から云って単なる他者ということになったら、キリスト教になる。

○法蔵菩薩―本願の象徴
法蔵菩薩について私が驚き、問いとなる機縁となった諸先生からいただいた教え。

・毎田周一師「大無量寿経研究」
本経上巻は法蔵菩薩の物語である。その法蔵とは誰のことか。私たちの真実の自己のことである。…
真実の自己とは有限の個物的生命と、無限な永遠の生命との絶対矛盾的自己同一である。このようなものとして、即ち私たちの真実の自己として、法蔵菩薩は自己を表現される。これ南無・阿弥陀仏の名号である。…
法蔵はかく自らを名号として南無阿弥陀仏として表現される。即ち私の真実の自己とは南無阿弥陀仏である。
（P10,11より）
また、四十八願について、
私たちが真に自覚的に生きているか否かの試金石は、法蔵と共に私たちがこの四十八願を熾烈に胸に抱くことが出来るかどうかにある。…
法蔵と共に四十八願を共にする、この自覚において私たちは救われる。

・本多弘之師―連続講座「浄土を求めさせたもの―『大無量寿経』を読む―」

・曽我量深師―「地上の救主―法蔵菩薩出現の意義―」

・曽我師は長い間「法蔵菩薩とは何か」を問い続けられた。そして率直に長い間わからなかったと言われる。

あり体に白状すれば、法蔵菩薩の御名は私が久しい間、もてあましていておったところの大なる概念でありました。

然るに、まず「如来は我なり」の一句を感得し、次いで「如来、我となりて我を救いたまう」の一句をいただかれ、遂に「如来、我となるとは法蔵菩薩降誕のことなり」と気づかせられたという。このことは、長らくわからなかった師には「千載の闇室を照らす灯炬を得た心地がした」のである。

・ここでは曽我師の法蔵菩薩に関する結論的な文章を紹介する。

・聖人の至心釈・信楽釈・欲生釈には、聖人の身において躍動せる法蔵菩薩が描かれている。

・信國敦師「浄土㈣―浄土の仏・地上の仏―」（P215～248）

・四十八願で「設い我仏を得んに、…○○であるならば、あるいは△△でないならば、正覚を取らない」と誓っている「我」とは法蔵菩薩である。

・法蔵菩薩の我と私たちの我はもともと一つの我なのである。そのことに気づかず、それに背いて、各自の小さな我だけを我だと思って固執しているのが私たちである。法蔵菩薩の我とは、そういう私たちを「凡夫」として見出し、その私たちをして「凡夫」であることに目覚めさせ、私たちを本来の大きな我に帰そうとするのである。…私たちの帰る本来の我自身というのが「仏」と呼ばれるものである。

・菩薩の我は凡夫の我によっては知ることができない我であり、すでに凡夫である自己を自覚している深い我である。

・そしてその願いとは、凡夫である自己に目覚め、仏すなわち完全に目覚めた人に成ろうとする願いである。

・菩薩の我は凡夫の我に対して超越的関係にある。

・凡夫・菩薩・仏は人間の本来的な構造を示している。中心は菩薩の自覚である。菩薩としての自覚が、自己を凡夫として自覚する。その自覚によって仏としての自己にまで導く。

※かくて法蔵菩薩と二人連れである。法蔵菩薩は私となって、私の迷いを体験し、私の迷いを自己の痛みとし、責任を感じられたのである。そして私の迷いを翻すという願いをもち、「安危を共同して」、私と共に迷いの旅を続けられたのである。私は知らなかったけれども、私の迷いの旅は一人旅ではなかったのだ。

されば自己は自己の思いをこえて、深くかつ広いものなのである。自分はどうでもよい存在ではない。自ら重んずべき存在である。

故に曽我師いわく、

私たちは、阿弥陀さまのおつむりの上を歩いているのですから、大切に生きなくてはいけません。

・「煩悩具足の凡夫・火宅無常の世界はよろずのこと、みなもって、そらごと・たわごと、まことあることなし」

これは聖人に現れた菩薩的自覚である。これは何によっておこったか、

「ただ念仏のみぞまことにておわします」念仏・南無阿弥陀仏による。

○内在的超越

・法蔵菩薩、我となって我を救いたまう。法蔵菩薩は他者ではない。本願は他者の願いというだけではない。故に内在である。しかし、対象的・実体的に凡夫の我と並んで「中」にあるのではない。内に超越している。内在的超越である。

・大森師

如来というのは、私たちにとって単なる他者でなしに、それは本来的なものである。…如来は外からの呼びかけじゃないんだ、如来は内から私を招喚する。（内在）内というたら何かというと、中ということじゃないですぜ。中ということじゃない。（超越）存在の根底ということ。それで（夜晃）先生の言葉の中に「内観の一道彼岸に通ず。」という言葉がありますのは、如来は内から招喚する。そのことを徹底させておかねばいけません。如来は私達の存在根拠。それを内というんです。如来は我々を内から招喚する。これが、一番厳しい真実のはたらきだと思います。外から呼ぶということになりましたら、私達は、平等にこの呼びかけを聞くということは出来ないでありましょうが、人間の存在根拠という、最も深い人間の内面から呼びかけるということになりましたら、それは平等に聞くことが出来る。これは皆同じように聞くことが出来る。

（『歎異抄』に聞く P71）

三、本願

○二元的な本願理解（ふり返り）

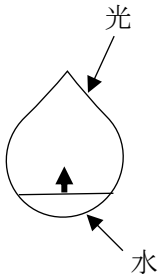
○内在的超越としての本願

・法蔵菩薩が内在的超越ならば、本願もまた内在的超越である。だから「弥陀の誓願不思議」というのである。

・曽我師は、法蔵菩薩は能化であって所化、すなわちタスケテであってタスケラレテであるという。されば本願はタスケテとして諸仏・善知識の上に仰ぐとともに、タスケラレテとして「自己衷心の願い」である。

・二元的な本願理解に破れて、自己衷心の願いに目覚めた例―暁烏敏師の転回

・内在的超越としての本願の譬え―どんぐりの譬え



○諸仏・善知識との出遇いの重要性

・「必然的」願い―本来へ帰れ！

・本願は「必然的」願いである。「必然的」とは、客観的真理にもとずいているということである。

・（譬え）平野修師の「輪ゴムの譬え」・あるいはパイプの中の水の流れとゴミの塊

・「生命の」願い―いのちの願い

・本願は「生命の」願いである。欲の願いをどんぐりの殻の願いとすると、どんぐりにはその内にいのちの願いがある。本願はいのちの願いである。

・いのちの願い―刻々に充実したいのちを生きたい。

・本願（プールバ・プラニダーナ）とは根源的な意欲である。自己衷心の願いである。自己衷心の願いといっても、自我の願いではない。自我を内に超えた内在的超越的な願いである。刻々に充実したいのちを生きたいという願いである。

・刻々に充実したいのちを生きるとは何であろう。
毎田師いわく、「今日はここまで学んだ。明日はまた新たに何を学ぶのだろう。明日の未知の学道に、今日胸ふくらむ期待を以て眠るその日々の生活をおいて、どこにも無量寿はない。」
どこまでも真理を求めていきたい、本当の求道精進の生活を送りたい、人生を完全燃焼していきたいという願いである。

・『大無量寿経』の法蔵菩薩の物語がその願いを語っている。
　讃仏偈―讃歎↓発願（願我作仏　斉聖法王）
　　智慧への願い、慈悲への願い、供養諸仏の行への願い、浄土建立の願い、
　　諸仏に証明を請う
　師の教え―「浄土を荘厳する行を教えてください」
　　「大海の水を升で汲みだしていくに、果てしない時間をかければ、海底の素晴らしい宝を得ることができる。そのように真心こめて求道精進していけば、どんな願いも成就しないことはない。」
これは「求道精進せよ」の教えである。この教えをうけて、求道精進ということが法蔵菩薩の存在の核心になる。

・私たちが普通考える求道精進は、求道精進して信心をうるとか、安楽を得るというような果を求める精進である。
　（川の流れの譬え）　↓↓↓↓　湖

・法蔵菩薩の求道精進によって得られる宝物とは、求道精進がいよいよ本当の求道精進になっていく、遂に無限に求道精進になっていくということである。
　（川の流れの譬え）　↓↓↓↓↓↓↓　・・・

・法蔵菩薩は様々な行をするのであるが、その中心となる行は供養諸仏である。

供養諸仏―諸仏に頭を下げて智慧をいただいていく。
そして法蔵菩薩が阿弥陀仏、無量光という名の仏になるとは、無数の諸仏から無限に学ぶことができるようになったということである。
・すなわち無限なる求道精進への願いが本願の内容である。

・「展開」する願い―願が願成就

・刻々に充実したいのちは、刻々に求道精進の願いに生きる。願がいよいよ本当の願になっていくのである。法蔵菩薩の願が成就するとはこういうことである。

四、「本願の宗教は絶対否定の宗教である。」

・私たちは自我・理性をたのんで生きている。それ自体は人間の人間たるところであり、よい面もあり、またやむを得ない事である。問題は私たちがそれのみに隷属・固執するところにある。自我・理性への隷属・固執を仏教的には「自力」という。
この在り方は、無常・縁起の真理に背いているから、根源的に不安を抱いている。そうして虚しさ（尺取り虫の修環）と孤独感（蚕の自縛）を抱えて苦しんでいるのである。これはいのちの本来に背いているのである。
・故に私たちは救いを求めるのであるが、救いは願に目覚め、願に任せるところにある。そこに現実に安住し、力強い生活が始まる。
・然るに、私たちが根源に目覚め、本願に目覚めるためには、自己が否定されなければならない。
如来は南無阿弥陀仏。南無する（頭を下げた）阿弥陀仏である。
如来は自己を否定して、われとなって内から呼びたまう。
南無阿弥陀仏を聞いたら、われは南無・帰命せしめられて、自己を否定し願に乗ずる。
南無阿弥陀仏である。核心は「南無」である。頭を下げられて、頭が下がるのである。
・故に善導は二種深信をいう。
・聖人は「煩悩具足の凡夫・火宅無常の世界はよろずのこと、みなもって、そらごと・たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」と言う。
・清沢師また云う。
自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗託して任運に法爾に、この現前の境遇に落在せるもの、すなわちこれなり。
・夜晃師は歌う。
なさねばならぬこともなく　なしてとがあることもなし
絶対自由無碍自在　六字の霊火に燃ゆる身は
・曽我師は「信に死して、願に生きよ」と言う。
・（譬え）コップに水が入るには、コップが空っぽになればよい。空っぽになれば水は自然に入る。ごみの塊が消えれば、パイプに清らかな水は流れていく。

○自己否定（機の深信）と自己反省のちがい

○自己否定とよしあし（善・悪）

・自己否定とは自力がすたるのである。自力とは自己肯定である。
そして自力について聖人は次の如く言われる。

① 自らが身をよしと思う心
② 悪しき心をさがしくかえりみる心
③ 人をよしあしと思う心　　（『唯信鈔文意』20/6、東P552）

・自己否定―自力がすたる一つの相は「よしあしをいわない」のである。
・私たちは自己肯定的存在である。これは根深いというより、私たちの存在そのもの。
・夜晃師「池の氷は表にはるが、心の氷は底にはる」
自力の心は心の氷であって底にはるから、ちょっとやそっとでは見えない。
・然るに聖人は「善悪の二つ、総じてもって存知せざるなり」、よしあしは知らないと仰せになる。また、善悪は宿業であると仰せになる。
聖人は、善悪への捉われから解放されて、また当為（ねばならぬ）から解放されて自由であらせられる。
・この転回は人間の能力・努力の上におこるのではない。
ただ聞法して、機縁熟して信心が発起するのである。
・信心の人も気づけばよしあしをいう日暮らしを送っている。
しかし信心の人のちがうのは、よしあしを言って苦悩するとき、念仏・南無阿弥陀仏に帰って頭が下がるのである。
そして頭が下がったその端から、またもや頭を上げ始める。これの繰り返しである。
岡本義夫師はこれを運動会の入場門の紅白の布巻にたとえられた。
これを繰り返しながら深まっていく。これが私たちの念仏生活ではなかろうか。